

タイトル

懺悔室

著者

明日腹 ベイ子

文字数

四五四〇字

あらすじ

一ヶ月後は文化祭！次々と出し物の候補が出る中、懺悔室という突飛な案に決まった二年四組。人気投票一位は校長からご褒美が。男子一丸となって、盛り上がりを見せる文化祭。そして、その裏側で見え隠れする、ある者たちの思いとは。

懺悔室

明日腹 ベイ子

一ヶ月後に迫る文化祭に向けて、男子学校は賑わっていた。黒板の前に、学級委員や書記やら、関係の無さそうなのが集まって、何やら騒ぎ立てている。

「じゃ、一つずつ開いていきまーす」

学級委員がふざけた調子で言って、椅子に反対座りしている副委員長長の和馬に四つ折りになった紙を開かせた。

「本格抹茶が飲めるメイド喫茶」

教室がざわつく中、書記の圭吾が黒板にそれを書いた。

「おい、これ宮野だろ」

「そうだよ、お前しか茶道部いねーじゃん」

茶道部の宮野君が頭をかいて笑った。

「はい、次ー」

和馬は、テンポよく紙をあけていく。

「焼肉祭り」

「二年 〇組俺等のカッコイイ写真展」

「ホストクラブ」

文化祭の出し物案は、匿名で募集したから、これでもかと面白おかしなものばかりであった。だから教室は始終ざわついていた。

「ホストクラブ良くね？」

「女子来てくれるかも」

「いや、使えるやつ何人いるよ」

終盤になると、あれがいい、これがいいと票が固まってくる。今の所、写真展と、ホストクラブが人気で、そんな中、和馬は最後の紙をあけた。

「懺悔室」

またもや教室内がざわついた。和馬は小さく書かれた追記を目を凝らして読んだ。

「えっと、誰にも伝えられない事とか謝りたいことを、小さな部屋を何個か作って聞いてあげるって書いてある」

「あー、何かさ神父さんに聞いて貰うやつだ！穴がちよつと開いててそっから喋るやつだ」

「それ、面白そうじゃん！」

そんな思わぬオチに、今まで黒板に書いたものが全部必要じゃなくなって、その「懺悔室」というものにあつたという間に決まってしまったのだった。

来たる文化祭三日前。

文化祭の準備で、教室は雑然している。委員長、書記の圭吾、副委員の和馬とか他にも何人かいて、文化祭までの段取りをこの日までの為に話あっていた。

懺悔室は、部屋が二つなければいけない。それと、秘匿性も必要である。だから部屋は薄暗くしようと決まった。それと、声が漏れないように、壁も厚く、天井も塞いで、完全な個室を作ろうとなった。

その個室は、段ボールを何層にも重ねて作る事になった。

秘匿性、と言っても、こんな所で本当にヤバイ話しをしてくる奴はいない。段ボールで十分と決めた。

そして、それぞれに委員長と副委員長が役割を皆に渡していく。そうやって、少しずつ気だるげに作業は始まった。委員長達はいつもの指定位置の黒板の前で、当日の役割とか、他の細かい雑用をする為に集まっている。

圭吾と他のクラス委員が、重たい暗幕を持って帰ってきていた、

「外の看板、松戸にやらしてんだ」

圭吾が、おもむろに委員長と和馬に言った。

「ああ、松戸美術部だから、いいんじゃないかって和馬が」

「え、あいつ美術部なの？和馬よく知ってたな。喋ったの見たことないけど」

委員長と圭吾が不思議そうに和馬を見た。

「それもそうだな、なんで知ってるの？」

委員長が和馬に言うのと、すぐ書記の圭吾が思い出した様に口を挟む。

「そーいやさあ、俺見たことあるんだけど、トイレから帰ってきて松戸の後ろ通った時に、何かさ猫の絵書いててさ、それがめっちゃ上手かった！」

そこに集まった男たちは、それを聞いてへえーと、感嘆の声を揃えた。

そうそうそれで、この暗幕をーと、和馬への質問はどこかに無くなって、作業がそのまま進んでいった。

普段ふざけていても、こだわるところはこだわる男達は段ボールで素晴らしい懺悔室を作り上げた。

外の看板には、「懺悔室―君の罪を許そう。そして君は、生まれかはる！」

と、圭吾が少々ふざけて考えた文が、美術部の松戸の手で完璧な色彩と形で描かれていた。

「すごいな」と、それを見上げて見た和馬は思わず声に出した。

こうして、文化祭は始まったわけだが、「懺悔室」は、かなりの話題の出し物となった。

「はい、こちらに並んで下さい。懺悔時間は一人五分となります」  
入る時は、ドア係が「悔い改めよ」と、言って案内する。

部屋に入ると段ボールでガチガチに固められた小さな要塞のような部屋が四部屋あって、これも、段ボールで出来た小さな窓を潜って、パイプ椅子に腰掛けて、五分間、神父役に罪を告白するのである。

春香さんは、友達の彼氏を好きになってしまったなんて、話で、

涼真君は、彼女がいるけど、好きなK-POPアイドルと比べてしまうなんて、男と女の話ばかりなのが、高校生らしい。

とにかくどんな話でも、何だかそれっぽいアドバイスをして、最後は

「貴方の罪を許します。神とニャーコの名において」といって、終わる。

ありがとうございますといって、皆、スッキリした顔で出てくるから、これは本当に、今回の文化祭人気出し物で一位を狙えるんじゃないかって、皆が心を沸き立たせた。一位は、校長が焼肉食べ放題に連れていってくれるからだ。

ところで最後の決め文句のニャーコというのが、いつまにか圭吾が発砲スチロールやらで作った猫のマスコットキャラクターの事で、入口のところに厳かに目を閉じて片手は何かを招く様になっている。その前に、立て看板がしてあって、「ニャーコ神父。手に触れるとご利益があるかも」と書かれていた。

最初これを見て和馬が「何これ」と圭吾に言った。

「マスコットキャラクターは必要だろー。黒猫なら神父みたいだし。和馬の待ち受けにしてる猫をモデルにしたから、その名前にしよう！何だっけ名前」

「え、ニャーコ」と、言った具合で名前は決まった。で、変なセリフもついて来た。

一日は、大盛況で終わって、二日目、最終日。

午後から、和馬は神父役として、部屋に入った。

入って、なるほど、何だかこれなら罪も打ち明けられる気がするなど、安堵感を感じた。

一人五分ずつ、話しを聞いて言って、一時間もすると、結構疲れた。人の話しを聞くというのは、とても体力を使うのだと、腕時計をチラチラと気にし始めた。もう少しで終わるなど。

もう、何人の話しを聞いて、次の人が来るのを待った。

次の人は、静かに入ってきた。何も言わずに座った。

「さあ、お話なさい。全て聞きましょう」と、和馬は用意されているセリフを言った。

そこでその次の人は少し、黙っていたけど、ゆっくりと、話し始めた。

「和馬君」

和馬は名前を呼ばれて身じろいだ。次の人はまた「和馬君」と言った。

「僕、松戸宝だよ。和馬君とすごく久しぶりに、話すよ」

「ああ、だから」と思わず和馬は小さく返事をした。

「和馬君にね、ずっと話したい事があってね、聞いててくれる？」

和馬はまた小さく「ああ」と返事した。

「僕、小学六年の時にね、公園で猫を拾ったんだ。黒い猫。一匹で淋しそうで、やせ細ってて、僕が何とかしてあげたくて、家に連れて帰ったんだ。ミャーコって名前つけて。でも、駄目って言われて、それでもこのままだときっと死んじゃうから、物置でこっそり飼ってたのに、やっぱりバレちゃって、元の場所に返してこいって言われたんだ。だから、僕は、また公園に猫を置いてきたんだ。毎日来ようって思ってる。でも、次の日もうニャーコは居なくなってたんだ」

薄暗闇だけど、小さな穴から、相手の影はボンヤリと見えている。

松戸宝は、ずっと横を向いて俯き気味に話していた。それを、反対側から和馬は見ている。松戸宝は続けた。

「保健所に連れてかれちゃったんじゃないかって、心配だった。どっかで死んじゃったのかもって。まだ小さかったし。でもさ、すぐ分かったんだ。和馬君が連れて帰ってくれたって。だって、和馬君、服が猫の毛だらけでさ。だから、だから、良かったって。僕、僕。ミヤッコを最後まで飼えなくて無責任なのに、かわいがったりして、そんな自分が許せなかったんだ」松戸宝の声が震えはじめる。

影が鼻をすすると、手で顔を拭う仕草をしたかのように見えた。

「和馬君にずっとお礼を言いたかったんだ。でも、中々声かけられなくて。和馬君、ミヤッコの事ありがとう。ありがとう」

「ミヤッコは……ミヤッコは元気だよ」

「良かったあ。ありがとう。あのセリフ言ってくれる？僕、和馬君に言ってもらえたら、自分の事も許せそうなんだ」

和馬は、少し躊躇って少しふざけたセリフを、静かに言った。

「貴方を許します。神とニヤッコの名において」

二年B組の懺悔室は、投票で一位を獲得した。その日は焼肉だと、皆片付けも早々に、学校からふけていった。残ったのは懺悔の部屋と和馬だけだった。

和馬は、懺悔をする部屋にそっとはいった。

誰もいない神父部屋に向かって、和馬は、慣れない感じで一人話し始めた。

―宝とは、幼稚園から仲良しだった。いつも一緒に二人で遊んでいた。宝は、引っ込み思案だし、すぐ泣くけど、一緒にいて、楽しかったんだよな。俺が馬鹿な事したら宝は大笑いしてくれて、本当に良い奴だった。小学四年位から宝とあまり話さなくなっただな。それでそこからは、もう他人の様に目も合わせなくなったんだよな。

中学は別々だったのに、高校で一緒になって驚いたな。クラスも一年も二年も一緒で。でも、知らないふりしてた。話す機会も無かったし。

和馬は胸ポケットから、四つ折りの紙を、出して広げた。

そこには「懺悔室」と書かれている。出し物投票の時の紙を和馬は一つ持っていた。

宝の字は綺麗だから、すぐわかった。宝が書いたって。

昔から綺麗だったけど、高校で見たらもっと綺麗になってたし、いつの間にか絵もすごく上手くて、やっぱり宝ってすごいよな。懺悔室なんて、俺にミャーコの事話す為に提案したんだな。宝、優しいから、ずっとミャーコの事抱えてたんだな。そうだよな、俺がアリ潰しゲームしてる横で、可哀想だから、やめてって泣いてたもんな。俺が一言でも、宝に話していれば良かったのに、何かもうどうやって声かけていいかわからなくて。宝、あのな、俺宝といううちに、宝はとつても良いやつなのに、俺はそんなに性格も良くない事に段々気づいたんだよ。だからさ、宝といると、自分が駄目な奴に思えてきてさ、そしたら宝と一緒にいるのが段々辛くなってきた、もっと自分が普通に感じれる場所にいたくて、宝から離れた。ごめん。宝の事を嫌いになってなんかないんだ。俺は、宝が泣きながら猫を公園にはなしてるのを見てたんだ。ミャーコごめんって、ずっと泣いてたよな。宝が居なくなつたあと、すぐミャーコを連れ帰ったよ。俺は宝と友達やめたことをずっと後悔してた。だから、ミャーコを大切に出来れば、また宝と友達になれるかなって、思った。今でも、優しくして、すごいやつなんだな、宝。だって、俺と話す為に懺悔室なんて考えちゃうなんてさ。俺は話しかける事も出来なかったのにな。

和馬はそこまで話すと、ふうと、大きく息をはいて、部屋を、出た。

もう暗幕はなくて、夕日が教室に入り込んでいた。それが和馬には容赦されたように感じた。スマホを開くと、圭吾と委員長から、どこにいるんだと、メッセージが入っていた。

「やば、もうこんな時間！」

メッセージを閉じると、待ち受けのミャーコが和馬に目配せをしている。

「ミャーコの写真見せたら、宝喜ぶのかな……」

和馬は少し待ち受けのミャーコを見つめた。そして、スマホをポケットにしまうと、教室を出た。壁に掲げられた、宝が書いた看板を見た。

そして、「君の罪を許そう。そして、生まれ変わる」と、呟いた。

